

---

報告者名	兼城 糸絵	被調査者生年	① 1954年(男)
調査者名	川村 清志	被調査者属性	① 潜業者組合の前組合長
補助調査者	兼城 糸絵		

---

### 被調査者（主な聞き書きは話者①から）

\* 話者② 生年未確認(男)、潜業者組合組合長

### 祭りの流れ

旧暦6月1日に行われる。当日は平日(木曜日)であったが、これまでも日程は特に変更する事なく行われてきたようである。去年も祭りは行われていた。

当日はまず関係者が午前9時に港に集合し、大きな旗をたてた漁船でかつて貞観の大地震で沈んだとされる神社がある場所へ行き、祈祷を行うという。旗は赤と紺の2種類あり、赤い旗には「奉祝 大根神社御祭 潜水業者一同」と書かれており、紺の旗には「鎮魂 大根明神御祭 宮城県漁業協同組合七ヶ浜支所」とあった。そして、赤の旗には平成17年旧6月1日と記されていたのに対し、紺の旗には平成23年3月11日と記されていた。これについて関係者に話を聞くと、赤い旗は平成17年の祭りの際に新調されたものであるといい、紺の旗は東日本大震災の津波で流されてしまったため、新しく作ったものだという。船には関係者の他に神主とかなざ町内会の代表者(女性)、町の広報担当者が乗船した。供物としてホウボウを2尾、酒、大根なども持参していた。神主は多賀城の柏木神社から来た者であった。本来ならば女性は乗船を許されないのだが、今回は取材ということで事前に許可を得ていたということである。

船は9時頃出発し、10時すぎに戻ってきた。海上は波が高かったものの、儀礼は無事に済んだようであった。その後、神社に移動し、祭典が行われた。

10時半頃に神社に到着すると、すでに花洲浜の人びとが神社に参拝し、それぞれ社務所にて寄付を手渡したり、準備されていたアワビを受け取っていた。中には名古屋から来ているボランティア団体などといった人びともおり、差し入れとしてビールを1箱持参していた。かなざ町内会も日本酒を1升寄付したとのことである。なお、配られたアワビは、モグリ(クグリ?)の人たちによって前日に準備されたものだという。それは予め細かく切られて味付けされており(砂糖・みそ・酒を使用)、その作業もすべてモグリの男性によって行われているという。これらのアワビを調理する作業には、女性は参加しておらず男性が行う仕事として認識されている。配られたアワビは、かしの葉に乗せられていた。地元の人びとはタッパーを持参するなど手慣れた様子でアワビを受け取っていた。

11時からは社務所にて男性神主と女性宮司による祈祷が行われた。祈祷には鼻節神社の総代長をはじめとして総代、潜水業者、漁業組合関係者、かなざ町内会の代表者、議員、手伝いの婦人たちが参加した。祈祷が終了すると神社に移動し、「祭典」が行われた。「祭典」では、神社の敷地内に祀られている大根明神(東・西)へ供物を備え宮司によって祝詞があげられた。その後に総代長から始まって一人一人(あるいは代表者)が榊を供えるのだが、その際にはかなざ町内会も呼ばれて榊を供えていた。かなざ代表者の方によると、初めて榊を備えさせて頂いたとのことである。

「祭典」が終わると、供物として備えられていた大きなアワビを「放流」(?)するという。「放流」とは、社務所の横から海に向かってアワビを投げることを指していた。最初は組合長が投げようとしていたが、遠くまで投げ

られるやつがいいだろうという声があがり、野球をしていたという若者が海にむかって2個投げた。周りで見守っていた者はそれをも見届けた後にちゃんと海に届いているのだろうかなどと話しながら、再び社務所に戻った。

社務所では、アワビをつまみに酒を飲み、参加者全員で直会を行った。その際にはかななぎ町内会から「アワビ豆腐」が配られた。これはアワビの煮汁(?)を何かに活用できないかというところから考えられた商品であり、セキ浜の作業所や店舗とタイアップして作ったという。宴は13時まで続けられ、その後解散となった。

### 被災後の状況

かななぎさんにはかなり助けてもらった。かななぎさんは布団を配ってくれて、在宅（被災後も自宅の被害が比較的少なかったため自宅にとどまった人々のこと）の人たちは特に助かった。仮設住宅に入っている人たちは自動的に支援がやってくるけど、在宅の人たちにはそういうことが少なかった。だから、尚更ありがたかった。

いくつかのスーパーも本当によくしてくれた。SEIYU やヤマザキパンは無料で食料や日用雑貨をわけてくれた。だから、今でも皆の間では「買い物はSEIYUで」などと言う風に言い合っているし、実際買いに言っている。当時は本当にありがたかったし、やっぱりお世話になった恩は忘れないから。

### 潜水業者（モグリ？クグリ？）について

現在20数名がいる。実際に動いている人は18人か。一番若い者は20歳ぐらいだという。現在の組合長は18歳のころからモグリを始めている。後継者不足が懸念されているようで、それに関する話は以下の通りである。

のり業を営んでいる女性が心配そうにモグリの組合長に話しかけた。彼女曰く、昔は各家から1人はモグリになっていたというのに、今は状況が全然違う。このまま後継者がいなくなってしまうと、よその部落に海をとられてしまうかもしれない。チサキを守るためにも、後継者を作らなければならない、と力強く話していた。それに対して組合長はうんうんと頷きながら話を聞いていた。

モグリの活動のピークは5～8月で、それ以外の季節はのり加工業といった具合に別の仕事をしている者が多いという。現在はウニをとっており、それも8月3日までだという。

漁の様子は以下の通りである。まず、朝8時頃に沖へ出ていく。目的の場所についたら、錘をつけて海中へと潜って行く（素潜り）。大体1時間潜ると船に一旦あがって休憩し、それから場所を変えて再度潜っていく。今回の祭りにむけてアワビを確保するために、あるポイントに生息するアワビを残しておいたようである。そして、祭りの前日には20数名のモグリが一斉にアワビを獲りに行き、40キロ（32万円ほどの価値があるという）のアワビを水揚げしたという。これについては、「昔からしてきたこと」として説明しており、話者が子どもの頃から旧暦6月1日になるとモグリは一斉に仕事を休んで祭りに参加することになっていると説明された。